

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生中学年作文の部 優秀賞

苦しいとうれしいの六十日間

松陽小学校四年

新出 しんで

遥世 はるせ

平成二十八年五月二十九日、わたしはブレイブボードという体をひねらせたりバランスをとって動かし進む遊具でうまくのれるように友達のおうちで練習をしていました。そしてたちゅう車場のどこかにつまづいてひっかかり落ちてしまいました。わたしは、体をささえようとして手をついた時、右手が曲がって初めてこっせつというものをしました。

そのときは「まだこっせつしていない」そう思いました。だけど、休んでいるにつれ、いたみはげしくなったので電話をかりて、お母さんに来てもらい病院に行きました。病院でレントゲンをとってもらったら、ほねの細かい方がずれていて、太い方がおれていました。そのレントゲン写真を見て、わたしはすぐびっくりしてもつといたい気分になりました。病院の先生は、まずまずいを注しやして、ずれているほねをうでをひっぱつてもどそうとしました。でも何回ひっぱつてもほねはもどらないから次の日その病院で手術することになりました。そしてわたしは次の日入院しました。

手術がおわってベッドで目がさめると、うでにギプスがされていました。はじめてつけたギプスは、暑いし、かゆいしすぐおもくて自分の左手でささえて持っていないと右手を動かせませんでした。かんごしさんはとてもやさしくて、手術の前に色々なけんさがあつて、その時わたしは何をされるか不安だったけど、やさしく声をかけてくれたからちよつとこわかったけど、がまんすることができました。

退院してすぐ、お友だちの家でたまっていた宿題をしていました。そしてたら友だちがその友だちの家に来て、わたしのために手紙などを届けてくれました。ギプスにも、文字や絵をかいてくれました。だからその時、みんなわたしのことを思ってくれてありがとう不自由でもがんばろうと思えました。その時からもう左手で宿題も書いていたし、ごはんも左手で食べていました。

それから一週間ごとに毎週病院でレントゲンをとりました。一週間ごとにおれた部分のほねが白くこくなつていってほねが作られているので、

人間の体つてとってもなおる力があるんだと思いました。

退院してから、日ごとにギプスがどんどんきたなくなつていって、くさくなつていって、すぐく外したくてしょうがない気分の六月二十九日、ギプスを半分にしてもらえました。かんごしさんがねつでギプスを切れる機かいでわたしのギプスを半分に切ってくれました。そして一回半分になったギプスをとるとわたしのうではまっ黒でした。手をあらつたらひさしぶりだったので、とてもきもちよかったです。しかもそのまっ黒の正体はあかで、手を洗つたらこすつてもこすつてもあかが出るばかりで、ずつと洗つてなかつたら、あかがたまるとおどろきました。

七月六日に病院へ行くと、ギプスが半分になりかくなつてひじの曲げのばしができるようになりました。

七月十三日には全部とれましたが先生から、
「まだかんぺきではないのではげしい運動はまだだめです。」
と言われました。

七月二十七日に病院の先生からうれしいお話がありました。
「もうかんぺきになりましたよ。」

と言われたのです。やつとわたしの習い事やわたしがすきな体育ができるから、もうこんなことにならないように気をつけようと思えました。

さいしよは重かった右手もすぐになれたし左手でごはんも食べれて、字も書けるようになりました。お風呂はすぐくべんでした。けれど工夫して一人で入れるようになりました。こっせつしたことでダメだとあきらめずに、左手でできることをさがしてちよう戦してみているいろいろなことをみにつけられたと思います。ケガをしてからの二カ月間いろいろなことをわたしにしてくれた家族友だち、病院の先生、わたしのたんにんの先生にかんしやしています。